

◆ 今週のコメント

- ・ 腸管出血性大腸菌感染症の報告が1例あり、本年8例目となっています。型別はO157(VT1VT2)、推定感染経路は、経口感染(バーベキュー)です。
- ・ レジオネラ症(ポンティアック型)の報告が、1例あり、本年5例目となっています。患者は、90歳代女性で、推定感染経路は、水系感染です。
- ・ ジアルジア症の報告が1例あり、本年2例目となっています。患者は40歳代男性で、推定感染経路は、性的接触(異性間)です。
- ・ 手足口病の定点当たり報告数は、3.05(122例)で、急増しています。京都市、全国共に過去5年平均値を大きく上回っており、夏季の流行のピークに向けて今後の動向にご注意ください。
- ・ ヘルパンギーナの定点当たり報告数は1.70(68例)で、先週に引き続き、過去5年平均値を大きく上回っています。夏季の流行のピークに向けて、今後の動向にご注意ください。
- ・ 咽頭結膜熱の定点当たり報告数は0.68(27例)で、本年で最も多くなっています。先週に引き続き、増加しており、過去5年平均値を上回っています。年齢階級別では、6箇月から7歳までの報告があり、1歳(7例)と2歳(6例)で、48.1%を占めています。

◆ 今週のトピックス: <伝染性紅斑>

伝染性紅斑の定点当たり報告数は、1.20(48例)で、先週に比べ急増しています。詳細をトピックスに掲載しています。

◆ 発生状況

全数把握の感染症

- ・ 三類:腸管出血性大腸菌感染症 1例【1月以降の累積報告数 8例】
- ・ 四類:レジオネラ症(ポンティアック型) 1例【1月以降の累積報告数 5例】
- ・ 五類:劇症型溶血性レンサ球菌感染症 1例【1月以降の累積報告数 2例】
- ・ 五類:ジアルジア症 1例【1月以降の累積報告数 2例】

定点把握の主な感染症

(市内定点数 インフルエンザ定点67, 小児科定点40, 眼科定点10, 基幹定点1)

定点	感染症名	定点当たり報告数	報告数
インフルエンザ*	インフルエンザ	0.01	1
小児科 (降順5位まで)	① 手足口病	3.05	122
	② 感染性胃腸炎	3.03	121
	③ ヘルパンギーナ	1.70	68
	④ A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1.33	53
	⑤ 伝染性紅斑	1.20	48
眼科	流行性角結膜炎	0.70	7

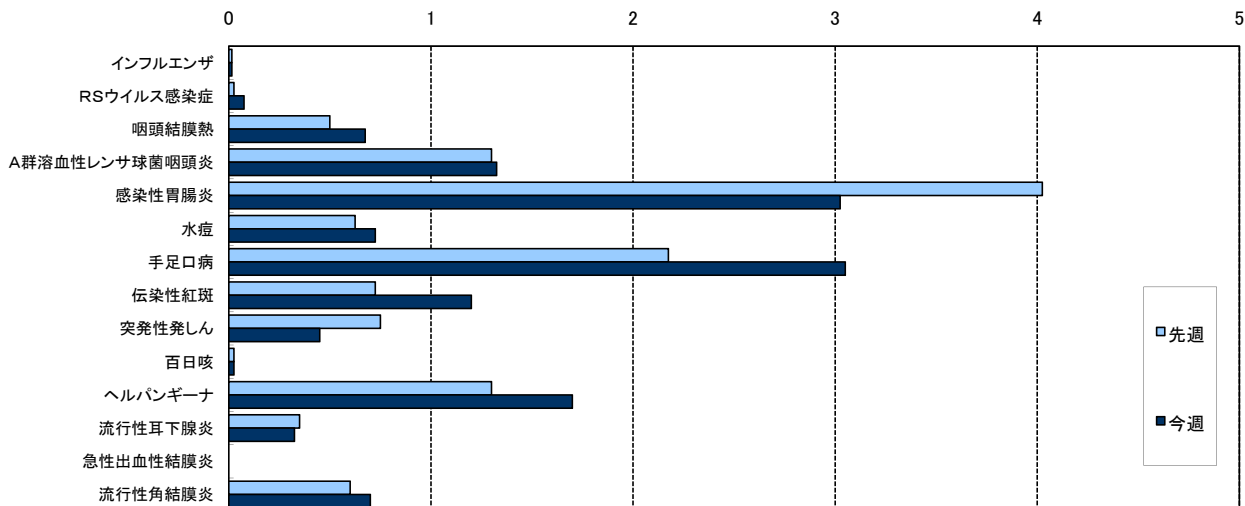
【次ページ以降の主な内容】

発生状況の概況グラフ / 今週のトピックス: <伝染性紅斑>

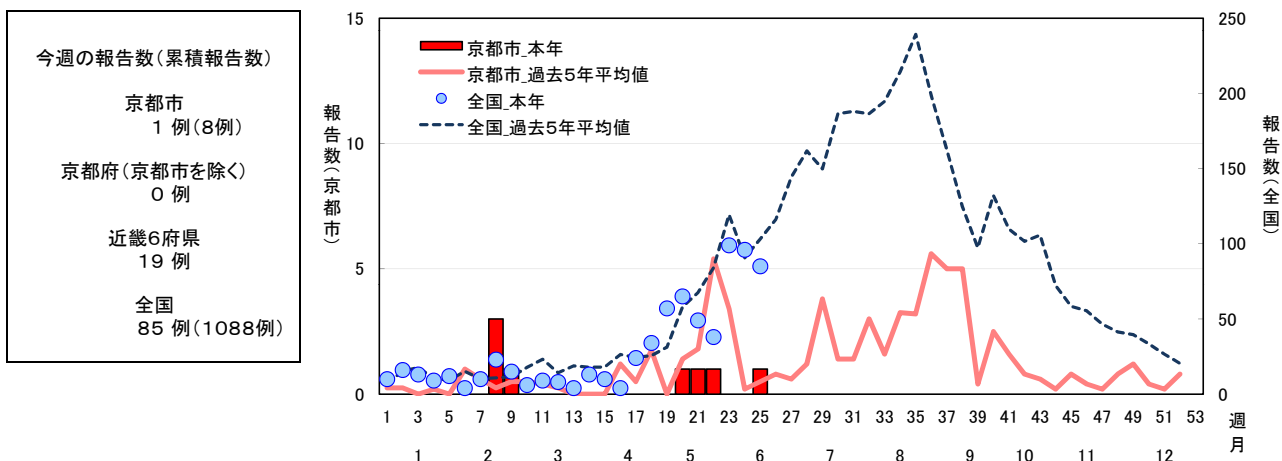
(注) 京都市のデータは、平成23年6月30日現在の報告数で、全国の還元データと若干異なる場合があります。また、本情報での患者数は、届出医療機関所在地での集計で、患者の住所を示すものではありません。

◆ 発生状況の概況グラフ

1 今週(第25週)と先週(第24週)の定点当たり報告数の比較

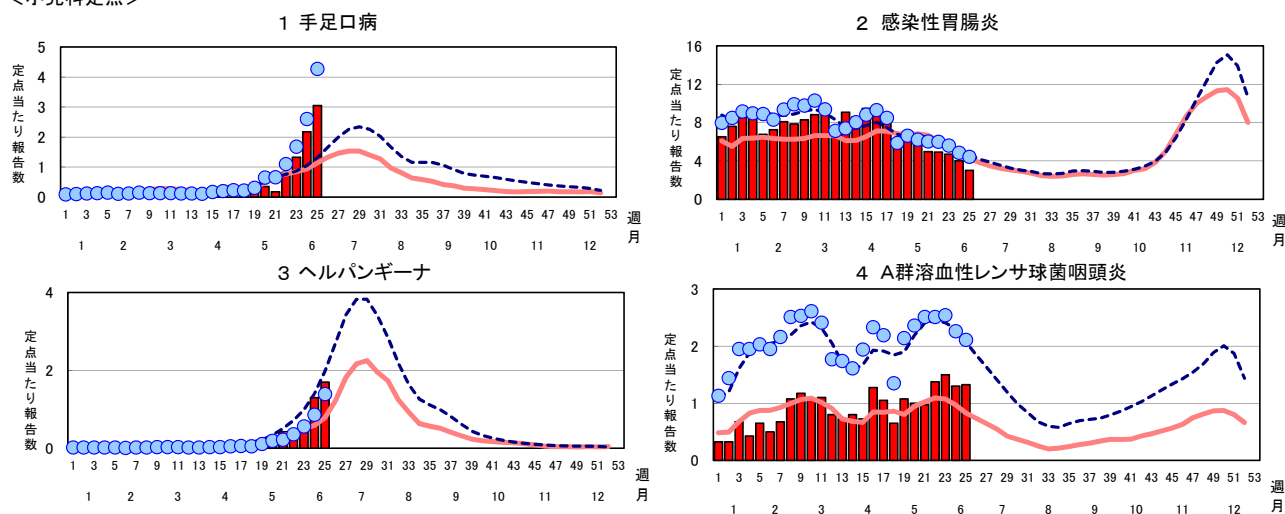


2 腸管出血性大腸菌感染症(三類感染症)の推移

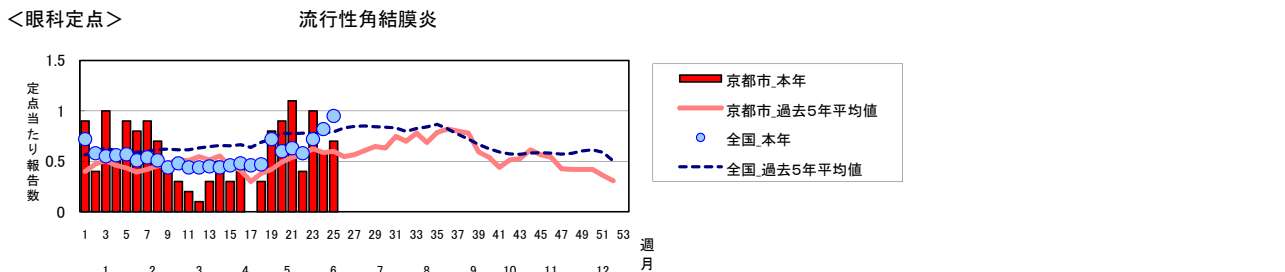


3 主な感染症の定点当たり報告数の推移

<小児科定点>

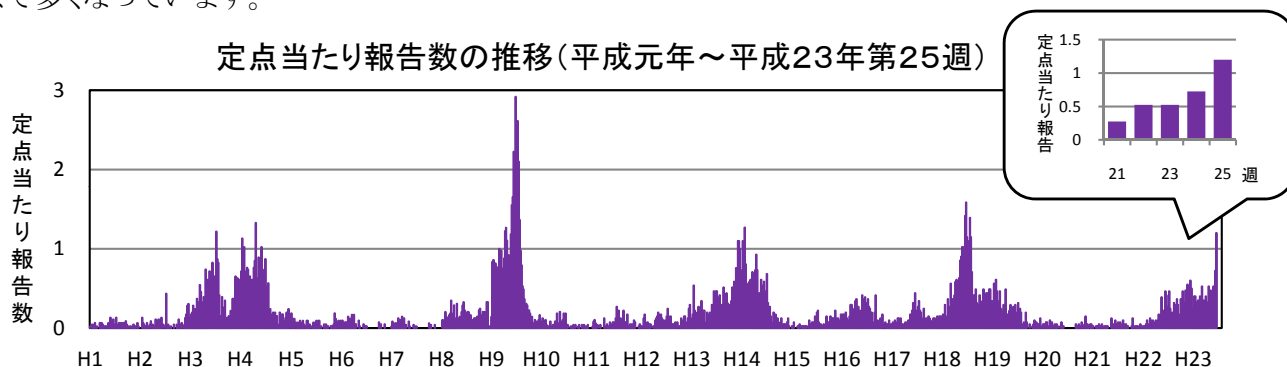


<眼科定点>

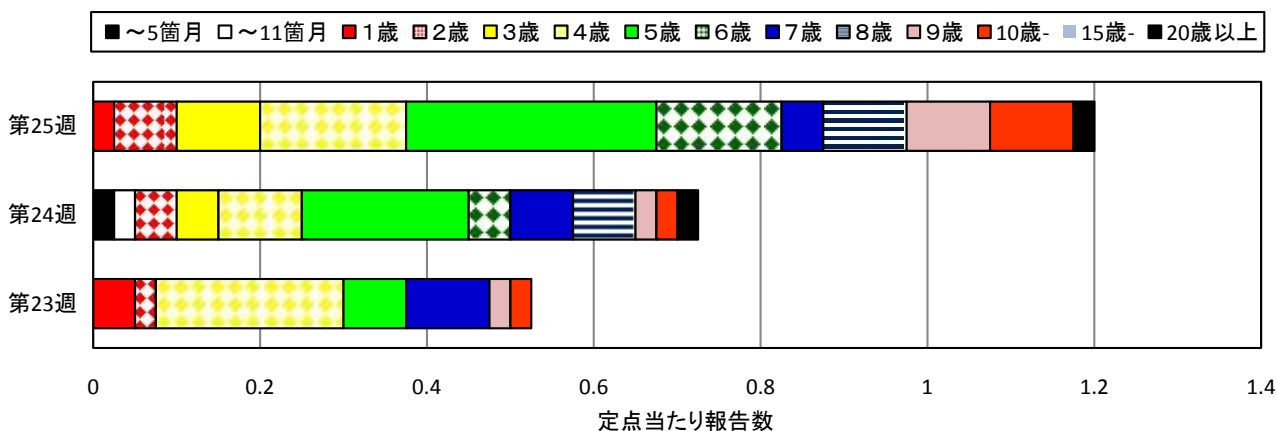


第25週(6月20日～6月26日)トピックス: <伝染性紅斑>

伝染性紅斑の定点当たり報告数は、1.20(48例)で、先週に比べ急増し、本年度で最も多くなっています。平成元年以降の定点当たり報告数の推移をみると、4～5年の周期で報告数が多くなっています。前回の流行(平成18年)から約5年が経過し、報告数が増加していますので、今後の動向にご注意ください。年齢階級別では、幅広い年齢層から報告があり、5歳が12例(25.0%)と最も多く、次いで4歳が7例(14.6%)、6歳が6例(12.5%)となっています。また、20歳以上での報告があり、本疾患は、妊婦から胎児への感染による、胎児異常(胎児水腫)及び流産の危険性が指摘されています。特に妊娠初期の感染が危険とされていますので、妊娠中及び妊娠の可能性のある患者には注意が必要です。近畿6府県の定点当たり報告数の推移をみると、すべての府県で先週に比べ増加しており、特に和歌山県で多くなっています。



年齢階級別定点当たり報告数の推移



近畿6府県の定点当たり報告数の推移

